

---

# 不条理な遊び

辰巳 結愛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不条理な遊び

### 【ZPDF】

Z9097

### 【作者名】

辰巳 結愛

### 【あらすじ】

「うつかり殺しちゃった」って何じゃあああ！！！そう叫ぶ俺の前に現れたのは、「エロス」、「タナトス」を名乗る双子と「クロノス」を名乗る、若干残念な服装のお兄さん。「チート転生」？何だそれ？

果たして、この「俺」の選んだ結末は……？

アンチ「チート転生」物の、別解釈。相変わらず救いは全く無いです。

(前書き)

当作品は、拙作の一つ、「生と死の戯れ」の後日談的立ち位置になります。

「クロノス」の誕生の流れはそちらで”確認下さい。

では、宣伝も終わった所で、始まります。

「『うつかり殺しちやつた』って何、じゃそりゃあああ……！」

ブチ切れで叫ぶ俺に、目の前の双子がクスクス笑う。

双子、と評したのはその姿が似すぎているからだ。違う点は、一方の服と髪は闇よりもなお黒い漆黒だが、もう一方は雪よりもなお白い純白。

見たとい、16、7歳くらい。俺と大差ない年齢に見えた。

さて。俺の現状を皆様に『』説明しよつ。

俺は確か、死んだはずだ。あの状況で『』今までピンピンしていたら、正直言つて化物だ。

極力グロい描写は避けさせてもらつたが、少なくとも俺の頭上に、工事に用いられる鉄筋共が落ちてきた……とだけ言つておこひ。死ぬかと思った、じやなくて、死んだはずだ。

そう知覚すると同時に、俺の目の前には今さつき説明したような白と黒の双子が、凄く嬉しそうに立つており……

「『めんね。君の事、うつかり殺しちやつた』

「僕達、暇なんだ。だから君の事、兄弟がうつかり殺しちやつた」

黒い方の言葉を継ぐように、白い方が答える。

いや、だから『俺の渾身のツツコミ』に答えてくれ頼むから。

「タナトスとエロスは、忙しいんだよ。人間の生き死にに関わらなきゃならねーからな」

「あ、お兄さんだ！」

「お兄さんだね、兄弟！」

何も無かつた真っ白い空間から滲み出るよつにして、今度は1人の男が姿を見せる。年齢は……俺より少し上の25、6といった所か。黒い髪に白いネクタイ、ジーンズを履いて、ワイシャツの柄はなぜか時計……と言う、若干頂けないセンスをしていると思う。まあ、双子に比べればマシと言えなくも無いのかも知れないが……いや、それにさ……双子自身は「暇」つってんのに、このお兄さんは「忙しい」って……どれだけあまのじゃくなんだ、この双子。

「それにもお前、壮絶な死に方したな。ご遺族、嘆いてるぞ」「家族なら、たぶん俺の事なんて心配して無いよ。あの入達、表では悲しんでるだらうけど、俺がいなくて本当は清々してるはずだから。」

そう、そのはずだ。父親はリストラされて酒びたりになり、しかも家では超DV。俺は俺で、そんな親父と顔を合わせたくないのでも常にネカフェ難民。俺に兄弟はいないから、親父の暴力の矛先は常に母だった。それを考えれば、母だって俺を恨んでいたはずだ。本来なら支えてやるべき存在が、逃げたのだから。友人らしい友人なんていやしないし、俺がいなくても世界は回るんだろうが……なんとなく、母には申し訳ない気持ちになつてくる。

今まで逃げてごめん、と。

「孝行したい時に親は無し」とか言つけど、俺の場合は逆か。あつはつは。

「1人で自己完結したところ悪いんだがな

唐突に、現れたもう1人のお兄さんが声をかける。どうやら俺の回想に、少々付き合つてくれていたらしい。

「自己紹介をしてないと思ってな。俺は『時間』。時を操る神……つて事にしておいてくれ。」

にんまり笑いながら、「クロノス」と名乗ったお兄さんは俺に向かって芝居がかつた態度で一礼する。

それに倣う様に、双子も俺に向かつて一礼し：

「僕は『<sup>エロス</sup>生』。人間の生を司る神だよ」

「そして僕が『<sup>タナトス</sup>死』。兄弟とは逆に、人間の死を司るんだ」

白い方、黒い方の順に挨拶され、俺ははあ、と小さく咳く。

「エロス」と「タナトス」と「クロノス」。俺を「間違えて殺しちやつた」とか抜かしているのは黒い「タナトス」の方らしい。

おいおいおい、「冗談じやねえ」。

あの鉄筋が落ちてきたのは、タナトスの仕業で、俺はまだ死ぬはず無かつたのに死んじまつたってか？

うわ、笑えねえ！仮にこれが夢オチだつたとしても笑えねえ！

いや、これ以上生きていっても、俺の人生楽しい事があつたとは思えないと、少なくともあんな壮絶な最期を送る程にはろくな生き方してなかつたはずだ。ごく普通に学校に通り、趣味が合わないと言う理由で友人を作らず、極力一人でいる事を好んでいた。

しかしだ！！

「うつかりで人を殺すなよ！俺にだつてまだ夢があつたんだぞ！」

「へえ？どんなん？」

にやり、とクロノスが笑う。

何だかまるで、俺の言おうとしている事を先読んでいるかのよう

に。

「そりゃあ……一応はキレーな姉ちゃんにモテて、イイトコの会社に就職して、そんで爺になつてから『ああ、いい人生だつた』とか抜かすような、平凡な人生?」

「……ありきたりだね、兄弟」

「ありきたりすぎて凄く笑えるね、兄弟」

「……人間の慎ましやかな幸せを馬鹿にするな、お前ら」

『はーい、お兄さん』

慎ましやかとか言うな腹立つ。  
それに人間、程々が肝心よ?

俺の言葉に笑うエロスとタナトスに対し、クロノスは呆れたような声ではあるものの窘めてくれる。

どうやら、クロノスはこの双子の「お兄さん」らしい。  
だとしたら羨ましい限りだ。俺にもこんな物分りの良い兄貴が欲しかった。

「まあ、そんな慎ましやかさんのお前に……アレだ。ちょっとした提案がある」

「提案? 何よ?」

クロノスの、ニヤリとした顔で放たれた言葉に、俺は軽く顔を齧めて問い合わせる。

曲がりなりにも相手は神様だ。きっと何か素敵な提案に違いないが……物による。

話を整理すると、俺は死ぬはずじゃなかつた。

だけど、死の神……タナトスの「うつかり」で死んだらしい。それも、鉄筋の下でぐつちゃぐちゃ。

そんな「うつかりの代償」……?

何、俺の残りの寿命に利子付けて返してきても、まだ足りないぞこの野郎。

生き返らせると言わんが、それに近い」とはやつても「もうね」が  
ねーの……

と思つた矢先、今度はタナトスが「ココ」と笑いながら俺の顔を  
覗き込み……

「君の残りの人生、好きな世界で過ごさせてあげる」「……あ？」

え、ごめん、意味わかんない。  
好きな世界? 何だそりや。

「兄弟、兄弟、説明が足りて無いよ」「ああ、ごめんね兄弟。そうだよね。つまり……君、アニメとか特撮とかゲームとか好き?」

「嫌いな人間がいるなら見てみたいくらいの廢人ですが何か?」「なら話が早いや。君、そう言つので納得して無い作品ない?」

納得して無い作品? ?

えーっと、アレはあいつが死ななきや納得できたし、こいつは何  
での男があんな行動取ったのか分らないし……

「言つておくが、納得行かない作品なんぞまんとあるぞ。」  
言つと、Hロスはくすくすと笑い……

「じゃあ、その世界の住人になつて、物語の筋を変えちゃおうつて  
思わない?」

「……所謂、原作介入つてやつか?」

「うん。今なら無敵の力と言つ特典付きーー。」

「どう、凄いでしょ? 凄いよね?」

「…………」

タナトスとエロスの笑顔が、こちらを向いている。  
まるで邪氣など無む邪じやな……純粹に「良い提案」をしてくるよ  
うな笑顔だ。

一方のクロノスは、何故だか深刻な表情で俺を見つめている……

「なあ、『好きな世界で何でもアリ』って言つなら、俺を『元の世  
界に生き返させて』くれない?」

「…………ええつ……!？」

「何で!?」

「いや、俺、アニメとかゲームとか特撮とか、原理主義者でさ。……  
作家の書いた通り、プロデューサーの意向通りなら別に良いかな  
つて奴だから、不満はあつても変える気は無い」

きつぱりと言い放つた俺に、タナトスとエロスは心底不服そうな  
顔になり、クロノスは面白そうにクックと笑つた。  
まるで、俺がそう答えるかを望んでいたかのよう。

「『『つづかり』だつたんだろ? サツキはああ言つたけど……やつ  
は俺、死ぬなら親孝行してからがいいわ」

特に母親。彼女のためにも、生き返つて「家族」と向き合いたい。  
どうしても親父のDVDが耐えられないなら、今度は母親を連れて  
逃げれば良いだけの話だ。

「なあ、出来るだろ?」

「…………そりゃあ、出来なぐは無いけどさ…………」

俺の提案に、エロスがぶすくれた様に言葉を返す。  
タナトスの方も、あまり面白く無いらしく、そっぽを向いている。

唯一クロノスだけが、面白そうに双子を見ていた。

「でも、あの死に方だよ。普通に生き返る事は出来ないんだ」

「まあ……バラバラだらうからな」

「つて言つて、鉄筋が垂直に貫通……」

「グロいから、勘弁して下さい」

俺の死に様を克明に語ろうとするタナトスにストップをかけ、俺は「生を司る神」の方をみやる。

そつちはそつちで、雨に打たれた小犬の様な瞳でクロノスを見ており……何だかよくわからんが、無言で「おねだり」をしているらしい。

その視線の意味を汲み取ったのか、クロノスは軽く一つ溜息を吐いて……

「わかった。鉄筋が落ちて来る少し前に、時間を戻せば良いんだな？」

……ああ、成程。「俺の死」自体を「無かつた事」にするのか。確かにその方が後腐れ無くて済むわな。

うんうんと納得した瞬間、エロスとクロノスが軽く手を振る。直後には、俺の体はうつすらと光りだし、眩暈にも似た、意識が遠退く感覚を覚える。

「一応、ここでのやり取りは忘れて貰つからね」

「でも、心に強く決めた事だけは、覚えてる様にしておいてあげる「ちょっとした利子つて事で」

タナトスとエロスが、交互に口を開く。

まあ……「家族と向き合おう」つて決心を忘れないなら良いか。

心の中で呟いて……俺は完全に「その空間」から脱した。

……あれ？ 俺、何やつてたんだっけ？

一瞬氣絶でもしてたか？

うーん、思い出せん。

人の迷惑省みず、歩道の真ん中でそんな事を考えた瞬間。俺の目の前を、鉄筋の束が通過した。

もうあと2、3歩踏み出していたら、間違いなく俺は潰されていた。

ゾクリ、と背中を冷たい物が駆け抜け……同時に、無性に家族に……母親に会いたいと思った。

我が家は、決して円満な家庭ではない。むしろ対極に位置していると言つても良いだろ？

暴力を振るう父親、それから逃げた息子の俺。

孝行しなきや……

何故か、強く思つ。

怖い思いをしたせい……なのかなあ？

思うや否や、俺は久方振りに実家に戻つて行つた。

\*

……で？

「『で？』つて？」

「いきなりどうしたのさ、お兄さん？」

オレの問い掛けに、タナトスとエロスが不思議そつな表情で問い合わせ返した。

オレが「時間」<sup>クロノス</sup>を名乗る様になつてしまふべく経つが、今回の様に

「生き返りたい」と願う奴は滅多にいない。  
と言づか、初めてだつたんじやないか？

「確かに、滅多にいなけれど……」  
「珍しい事じやないんだよ」

「うなのが。

つて、オレが聞きたいのはそんな事じやない。  
オレが聞きたいのは……本当に「うつかり」だつたのかつて事だ。

「お兄さん、今更何を言つているの？」  
「そうだよお兄さん。兄弟が『うつかり』で人を殺す訳無いじやない」  
「うだよ」

いや、オレの聞き方が悪かつたか。

オレが聞きたいのは、「寿命のある奴」を本当に「うつかり」を  
装つて殺したのかつて事だ。

その瞬間、双子はニヤリと笑つた。  
……あー、やつぱり、こいつら……

「よく分かつたねえ。お兄さんの考えてる通りだよ……」

「いくら兄弟でも、うつかりで余命のある奴を殺すなんて、滅多に  
ないよ」

「そうだよお兄さん。僕がうつかり余命のある奴を殺したのは、今  
までお兄さん、ただ1人だけ」

……オレには寿命があつたのか。そつ言ひ意味では、オレは確かに「うつかり」だ。

いや、それはもうどうでも良い。結局、「うつ」なつたんだから。

それにしても……それじゃ、さつきの奴は……

「多分、もう少ししたら死ぬんじゃない?」

「それも、壮絶な死に方じやないかな?」

……ふつ……

どちらにしろ、あの野郎は死ぬって事か。

……しかも、報われねーなあ……

地上で、さつきの「生き返った男」が、彼が守りつと決めた母親に、刺し殺されるのを見つめる。

長い間、那の暴力に曝されたせいだろう。その時は完全に死んでいる。恐らく、狂つたのだろう。

オレが「こう」なつた様に、全てに絶望して。

「安心して、お兄さん」

「お兄さんには、僕達がいるよ」

「ずっとずっと一緒にいるからね」

擦り寄る双子に笑いかけ……オレはまた、次のカモを待つのだつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n90971/>

---

不条理な遊び

2010年10月14日19時23分発行